展望

時が濾過する

鈴木　竹志

二〇〇二年に出された現代短歌全集（筑摩書房）の最終巻になる第十七巻には、現在の歌壇において、結社のリーダーやそれに準ずる役割を果たしている女性歌人の第一歌集が多く収載されている。阿木津英の『紫木蓮まで・風舌』、今野寿美の『花絆』、栗木京子の『水惑星』、小島ゆかりの『水陽炎』、米川千嘉子の『夏空の櫂』などである。これだけの歌集を選んだこと自体が、今から思えば炯眼と言えよう。もちろん選ばれた歌集そのものの歌が優れていたからではあるが。

さて、これらの歌集を現在の視点で読み返すとどうなるのだろうか。こんな疑問が湧いてきた。二十年近くの歳月が経ち、歌の読みもかなり変化してきたのではなかろうか。その変化のなかでも保たれている歌の質というものはどうなのかを考えてみたくなった。まず阿木津英の『紫木蓮まで・風舌』を久しぶりに読み返してみた。

いにしえの王（おおきみ）のごと前髪を吹かれてあゆむ紫木蓮まで

風切りてスカートの裾広くゆく尊（たっと）ばれたる女はありや

卵巣を吊りて歩めるおんならよ風に竹群の竹は声あぐ

これらの歌は刊行時よく話題に上った歌である。男性をことさらに意識して女性という存在の自立性を、露悪的と思えるほどに詠み上げた歌である。当時の女性歌人たちの中には、こういう歌に勇気づけられた人たちもいたのだろう。しかし、現在という時点で読み返してみると、私はこういう歌についてはさほど心を動かされない。申し訳ないが、そんな時代もあったなと回顧的に思うだけである。しかし、この歌集の後半に至って、心を動かされる歌が目立ってきた。とりわけ掉尾の「冬鴨」の一連には、私が好む歌を多く見つけることができた。

ひと夜経て出でて来れば葉を脱ぎし公孫樹の下に黄の溜あり

日は冷えて声稀稀にみずうみに浮かめる鴨のくろき一群

みずからの背（せな）の羽毛に首置きて鴨らは夢む波のまにまに

軽鴨は湖（うみ）の汀を退きぬふかく眠れる二つを置きて

これらは、阿木津の、三十歳以前の歌である。三十歳前にすでにこのような歌を詠むことのできた阿木津の力量は認めざるをえない。そして、この歌集を評判にした歌は、実は阿木津本来の歌でなかったことを確信した。時代が望んだ歌を詠んだが、その時代が過ぎれば、そのような歌は役目を終えてしまうのである。そういう歌だったのだ。それに対して、「冬鴨」の歌は、短歌という詩型のもつ本来の韻律と表現の着実さによって、生き残った歌なのである。時の流れに濾過されて、今こそ輝きを見せる歌と言ってよいだろう。その証拠に阿木津の最近の歌は、この「冬鴨」の系譜につらなる歌なのである。

室（へや）うちに映る葉むらの影あはくさざ波立てりもろもろがうへ

滴りの夕日の蜜はうら若きさくらの幹の膚へを濡らす

ともに今年の「八雁」三月号掲載歌である。定型の韻律を重視し、対象に対する鋭い眼差しを向けて詠んだ歌である。時代の趨勢に関わりなく自分の歌の世界の落ち着く先はここだという意志さえも見える。